

人馬共に  
鼻腔より  
血を滴せ

壯健の人  
も大病の  
體

絶頂の撮  
影  
西風強く  
暫くも停  
まるべか  
らず

午前九時十七分發、緩歩徐行、東の方昇坂に向ふ。傾斜甚だ急ならざるも、一步一步呼吸迫り、迫ること甚しければ休憩し、休憩暫時にして又歩を移す。呼吸は尙ほ斯の如くにして、漸く繼ぎ得べきが、頭痛は到底如何ともし難く、耳鳴り眼眩まんとし、人馬相共に鼻腔より血を滴らすに至る。聞くなりく人水に溺れ、呼吸次第に迫りて鼻腔血を出すに至れば、將に絶息せんとする時なりと。水陸多少の差異あるや否やを知らずと雖も、今一步を進めなば、將に絶息せんとするの想あり。食慾盡き、渴氣絶へ、身は是れ壯健なる人なるも、而も大病の體なり。歩むも歩む如くならず進むも進む如くならず、宛然夢に似たり。左右を顧みれば、同行皆顔色なし。馬夫は嶺下に於て馱載を改装す(急坂を昇降する時毎に然り)予は此間を利用し勉強して撮影を試む時に午後四時、暮靄既に起り光線不十分なりしを遺憾とす。斯して遂に絶頂に達するや、氷雪全く消えて更に痕なく、西風強く吹いて暫くも停まるべからず。されどそも此處は何處、實に予が出發出來果して通過を全ふし得べき否や、若し通過し能はずとせば、予が此の旅行は、空しく九仞の功を一簣に虧くの恨おらしむべき最難所と懸念せし、世界の高嶺崑崙山道の最高點にあらずや。